# 生き方を再肯定・再解釈するために

## 日本の宗教

多神教と言われる日本社会が、一神教であるキリスト教とどう向き合い、宗教をかたちづくってきたのか。同志社大一神教学際研究センター長の小原克博教授は、近著「宗教のポリティクス」で詳細に分析している。近代化を軸にしつつ、日本の宗教が持つ特性や歩んできた歴史について論じてもらった。

（二松啓紀）

こはら・かつひろ　1965年大阪府生まれ。同志社大大学院博士課程修了。専門はキリスト教思想。2004年から同大教授。８月から現職。著書に「神のドラマトゥルギー」など多数。

# 価値観を相対化する知恵を

## 結果求めた「経済教」を経て

### 同志社大・一神教学際研究センター長　小原克博教授に聞く

何よりも気になるのは、疑問を感じることなく日常で使う言葉「宗教」だという。小原教授は「西洋のキリスト教をモデルとして、明治期に作り出された概念だ」と語る。

明治以前には、各地域で神さまも仏さまも同じように祭られていた。土着の習俗など、さまざまな「民俗的なもの」も残っていた。

しかし、欧米諸国と対抗するには、キリスト教に対応する「宗教」が必要と認識された。

そこで明治新政府が最初に行ったのが神道の国教化だった。神仏分離政策を推し進め、神道を中心に近代化を進めると同時に、仏教にはキリスト教に対する防波堤の役割を期待した。その上で、「仏教や神道に属さない『民俗的なもの』は迷信として排除した。迷信を断ち切り、国民と国家を結びつけようとした」

近代化は、大日本帝国憲法の成立により結実する。そこでは、欧米に不平等条約を解消させる条件として宣教師やキリスト教徒の安全を保障する必要に迫られ、「国家の安寧秩序に反しない限り」との条件の下、「信教の自由」が保障された。

小原教授は「まさに憲法の二重性だ。外には信教の自由を表明しつつ、内には天皇を中心とした反西洋的な国家を目指した。近代天皇制の実態は一神教に近かった」と語る。

しかし、敗戦によって天皇が象徴になると、宗教的な存在の空白が生じてしまう。それを埋めたのが、「経済成長」だったとみる。

「心も魂も国家にささげた日本人が、具体的な結果を求めるようになった。豊かになることは良いとする価値観が広がり、かつて宗教に求められたものまでが経済成長に置き換わっていく」

宗教界も例外ではなく、信者を増やし、組織を拡大することに奔走した。信者を序列化して、競争心を煽る宗教団体まで現れた。「経済教」のような状況が生じてしまう。

「日本が経済成長を続け、世界のナンバーワンであり続けたならば、欧米諸国でさえ果たせなかった純粋に世俗的な近代化モデルを実現したかもしれない。いずれにせよ、物質的な満足は、伝統宗教の存在意義に大きな疑問を投げかけることになった」

しかし、バブル経済は崩壊し、低成長時代に入った。今度は、破綻した「経済教」に置き換わるかのように、カルト的な宗教やスピリチュアルが裾野を広げつつある。

「多くの宗教は、既存の価値観を否定するかたちで生まれてきた。キリスト教の宗教改革、日本の鎌倉仏教は新鮮に映った。しかし巨大化し、組織化するにつれ、そうした宗教が人びとの従うべき規範になってしまう」

老若男女を問わず、生きづらい時代となった。資本主義に対抗したマルクス主義の存在は、今やゼロに近い。

小原教授は「今こそ、われわれが持つ価値観を相対化する宗教的知恵が必要だ。お金があればハッピー、なければガッカリのような世界観から、自分の生き方を再肯定・再解釈する宗教のあり方こそ求められる」と語る。

「宗教のポリティクス」は晃洋書房刊、2205円。

小原克博教授の近著「宗教のポリティクス」